

試されるより 啓発される心地よさを

より知的な日本語を手に入れたい

平野啓子



静岡県沼津市出身。都立国立高校から早稲田大学文学部卒業。大学在学中にミス東京に選ばれ、東京都歴史文化財団勤務を経て、NHKの「おはよう日本」のキャスターに抜擢され、大河ドラマ「毛利元就」の語りなどに活躍。日本語の美しさや文化を紹介する語り部として活躍するとともに、大阪芸術大学放送学科教授。平成9年度文化庁芸術祭大賞を受賞。

日本語検定には12人の評議員が選ばれ、紅一点が「語り部」として活躍中の平野啓子さんです。平野さんに「語り」の世界に入ったきっかけや日本語検定に対する期待などを伺ってみました。(質問者：時事通信社編集委員 牧俊朗)

Q：「語り」の世界に入ったきっかけは何ですか。

A：子どものころから、文字を見ると声に出して読み上げるという癖がありました。もともと朗読が大好きで、東京都の外郭団体で仕事をしている時に、イベントなどで司会をするということもあり、話すことを仕事にしてもよいなという気持ちがありました。

そのころに、自分の趣味探しの中で、自己表現として朗読の勉強を始めました。もっと上手になりたいと思って師匠探しをしている時に、伝説のラジオドラマと言われる「君の名は」のナレーターだった鎌田弥恵さんの朗読と「語り」に出会い、文学の「語り」という世界を初めて拝見しました。大変感激して、お客さんの反応をうかがいながら、自分の心の表現として発する「語り」を自分もやってみたいと思いました。

「語り」の基本は、一旦全部の言葉を自分の心に刻み込んで、そして心の中にその言葉を持ち歩いてそれを誰かに伝えたいという時に、熱意を持ってこれを相手に伝えることだと思っています。

Q：今の日本語の現状、特に若者の言葉遣いが問題となっていますが。

A：私も言葉遣いではよく失敗しているので、あまり偉そうなことは言えません。が、今まで言われていた文法上のものがどこでどう崩されたのか分かりませんが、自然と文法から

外れる言葉や言い放しの言葉が多くなっていると感じています。

「てにおは」が正しいのか間違っているかどうか分からないほど、言葉の一部分しか話さない若者が多くなっていると思います。それでも会話の上では何とか成立しますが、例えばあいさつなどで、一つの文章として人前で話すことができるのかどうか不安を感じます。

また、言葉の選び方もそうですが、一番気になるのが声の表現、語調です。語尾をしっかり丁寧と押さえていないということが気になります。怒っている時にそうなりがちなのですが、日ごろの会話の中でもそうになっているなと思います。

Q: 若者の有力なコミュニケーション手段に成長しているメールについてどう感じていますか。

A: 人と対面して話していると、自分ではいい話だとは思っていても、実はそうでなかったという場合があります。対面の場合だと、相手に声で言い返されるとか、顔色とか目の表情とかに反応が表れてきますね。

そういった反応を見ながら、今私がいいと思って使った言葉が相手にとってはそうでなかったことが分かる、それが勉強になりますね。相手に自分が思った通りに受け止めてもらえるように話すというコミュニケーションの基本が身に付けられます。

メールでは相手の顔が見えませんので、それが分かりません。あまりメールばかりを続けていると、危なくなるのではないかな、と思います。

Q: 日本語検定の12人いる評議員の一人となっているのですが、この検定に期待するところをお聞かせ願えますか。

A: まず、私自身にとっても、もっと日本語を正しく話せるようになるのではないかと期待しています。自分の戒めにもなりますし、啓発される心地よさというのを感じます。

多くの人にとっても、同じように、試されるというのではなく、自分が啓発され、より知的な日本語を手に入れることができると思ってもらえたら、と期待しています。

海外講演の時に感じるのですが、外国の方は、日本語を情報として聞く時とそうでない場合があります。一つの言語の美しさとして聞いてくれることがあります。そういう時にどういう日本人に会いたいかと考えると、正しく美しい日本語を話す日本人に会いたいと思っているように見受けられます。

中国の北京で講演した後に、学生さんから「竹取物語を原文で聞いたかった」ときれいな日本語で話しかけられ、いろいろな質問の後に「おつかれさまのところ、申し訳ありませんでした」と帰っていきました。日本の若者がこういう言葉を言えるのか危機感を感じました。